

私学中学生の学習意識調査に基づく教育方法に関する再考察

日中異文化交流の展開

原 健 一（藤嶺学園藤沢中学・高等学校）

はじめに

本研究は私学中学生の学習意識の向上を目的に私学教育の実践を報告し、効果的な教育方法を検討することが目的である。また平成23年度の日中異文化交流の検討¹の再考察である。

本文は平成24年の3月に実施された北京研修に参加した49名の生徒の実際の様子、事前・事後レポート、筆者の引率経験をもとに異文化交流での生徒の変化の考察を行い、さらに私学の教育方法を検討するための研究である。また23年度研究の上海外国語大学附属外国語学校の中学校(以下、上海外大中学)と本校の中学生の学習意識調査²に加えて本研究は前述の北京研修生徒と北京第八中学怡海分校(以下、怡海分校)生徒の学習意識調査の考察から教育方法を検討する。

1. 中学3年生 北京研修

当校は、鎌倉時代、念仏と遊行に徹し捨聖と呼ばれた時宗の開祖一遍上人の教えを根本として、大正四(1915)年に創立された男子校であり、今年度生徒数は中学368名、高校608名である。建学の精神である「質実剛健」「勇猛精進」³は、人間完成を目指した精神である。一遍上人は「臨終即ち平生なり」という思想を持たれ人間として生き抜くための平生の心構えを教示された、その思想に結びついた建学の精神である。2015年に創立100周年を迎える私学である。

2001年中学校開校時に、建学の精神をもとにアジア・オセアニア地域の重要性が高まっていく時代に、柔軟な発想と旺盛なチャレンジ精神を持ち、国際社会に太刀打ちできる21世紀のリーダーの育成を目指す、逞しい男子の育成を目指す教育方針が作られ実践されている。中学3年生の北京研修はこの教育方針の具現化の一つである。ホームステイもあり参加は希望制である。

(1)行程

平成24年3月に行われた北京研修には49名が参加した。3月30日(金)の夕方、成田空港を立ち、4時間後に北京の首都空港に到着した。海外旅行が初めてという生徒も多くいたが、団体旅行の雰囲気と不安の表情も見せず、北京市内のホテルへ専用バスで移動。日本とは違いホテルの洗面台の栓を直接指で押して開けることが分からなく戸惑う生徒もいたが立派なホテルに満足している様子であった。翌日訪れる世界遺産万里の長城等の北京観光を楽しみに就寝した。

翌31日(土)は万里の長城、景山公園などを散策、昨日同様、日本語が通じる友人と日本にいる頃と同じように万里の長城では上り坂を登りお土産を買い、景山公園ではカメラで写真を撮ったり日本での研修旅行と変わらず楽しんでいる様子であった。翌日はいよいよホームステイが始まる。

翌4月1日(日)朝8時過ぎにホテルを出発。昨日、バスで移動した際に車が混んでいたため少し予定よりも早く怡海分校に向かう。生徒の様子は3日目になり研修に慣れてきたところで学校訪問、ホームステイとやや緊張している様子も見受けられた。怡海分校到着後、すぐに校舎の前で記念撮影、スポーツ交流、歓迎会、美術の授業後、両校の校長先生からお話があり、いよいよ自分のホストの生徒との対面。一人ずつ名前が呼ばれ、対面してすぐに学校を出発していく生徒とホストの怡海分校の生徒。これまでの北京研修事前学習会や歓迎会のダンスや歌の出し物の練習そして本日までの北京研修もすべて同級生と一緒にやってきた生徒たちが一人でホームステイ。その顔は緊張と不安、そして何とかホームステイで上手く話しをしようという顔に見受けられた。生徒の引率で筆者も同行してきたがこの日に2軒のお宅を訪問させて頂き、翌2日は天安門広場で数名の生徒に偶然会ったほかは、3日の夜にホテルに生徒が戻るまでは生徒各々がホームステイになる。

3日にホテルに戻って来た生徒は皆、表情豊かに帰って来る。記録のためにビデオを回していた筆者もその表情の変化に驚く、そしてホストとの別れの時に涙を見せる生徒もいる。ビデオカメラに今の感想を自分から言う生徒がほとんどであった。信じられないことに万里の長城ではカメラを向けるとすぐ隣の仲間と話す様子であったが、今は自分の感想をカメラに話す。このホームステイで生徒たちは何を感じていたのだろうか。2日間の様子を事後の感想のレポートから考察する。北京研修は、その後、翌日午後に首都空港に移動し、成田空港に夜到着し解散となる。

(2)事前・事後レポート

事後レポートを考察する前に、北京研修での個人の目的を考える機会となった事前レポートそして事後レポートの項目を示し考察を行う。

①事前レポート

I. 北京研修に、何を求めて参加しますか？【目的】（明確にない人は考えて書いて下さい）

- | | |
|--|-------------------------|
| ・アジア圏の隣国である中国を体感して、現地の生徒との交流で国際感覚を身につける。 | ・衣文化に興味を持って参加したい。 |
| ・中国語の基本的なことを覚える。 | ・先進国になる中国を見ておくため。 |
| ・全力で楽しむこと。見聞を広げること。 | ・英語を話したい。 |
| ・経済大国という報道があるが日本と違う国、文化も違うことを知りたい。 | ・安全な日本から行き、中国を知りたい。 |
| ・ホストファミリーと仲良く過ごしたい。 | ・自分の価値観を上げたい。 |
| | ・一般家庭の食事を楽しみたい。 |
| | ・中国の理解をしたい、中国の人々と交流したい。 |
- など

II. 北京研修に参加したいと思った理由は何ですか？【理由】

- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| ・外国を体験してみたい。 | ・担任の先生が強く薦め、英語だけで生活してみたかった。 |
| ・親に見て来いと言われたから。 | ・卒業生の北京研修後もう一度言ったという声から。 |
| ・中国人の私生活を知らたくて。 | ・世界的に働きたいから。中国に友達がいると自慢できる。 |
| ・親の薦め、中国を知りたくて。 | ・万里の長城に登ってみたい。 |
| ・他の海外研修より短期間であった為。 | ・本場の中華料理を食べたくて。 |
| ・友人に誘われて。 など | |

事前レポートの目的・理由には、経済成長が著しい中国に関心を持ち参加した生徒や語学に興味があり参加した者、中国人との国際交流、異文化交流をしてみたいという声があり、また理由は両親、先輩、担任の薦め、同級生と一緒に参加という声があった。項目のIII.には中国の印象について設問があり当然ではあるがテレビからのステレオタイプの情報が目立ち「世界遺産」「偽物商品が多い」「中華料理」「情報が規制されている」「目覚ましい経済発展」「環境がよくない」「大気汚染」「若者みんな頭がいい」「高層ビルと農村」「発展途上国」などの記述があった。

②事後レポート

I. 北京研修に参加して印象に残ったこと、嬉しかったこと、驚いたことなど感想を書きましょう。

- ・八中生徒の妹の英語が上手かった。ホストファミリー(母親)が日本語を話せた。
- ・故宮など長い歴史のある国だと思った。 ・日本の水道のよさを感じた。
- ・頑張って中国語でホストの祖父に自己紹介しました。
- ・ホストと別れの時家族と握手をすると何だか悲しくなり涙がでそうになった。車を見送った。
- ・「北京にずっといたい？」と先生に聞かれて、そう思った。よい思い出になった。
- ・北京ダックを食べた。ホストの親戚7名と食事をした。茶葉を5袋も買った。
- ・英語の力が不可欠。ホストファミリーと買い物時など。今後日常会話ぐらいは話したい。そして父親に自分がなった時にその子供に英語を教えて同じ感情になってくれたら嬉しい。
- ・ホストファミリーと話すのに自分が話せないで時間が掛かった。天安門広場へ行きまた北京ダックを食べた。中国語不勉強でお別れや感謝の言葉が言えなかったことなど反省です。それでも僕はホームステイに言ってよかったです。言葉が通じない事を知れたからです。
- ・ホストの母親の会社の友人が寿司を僕のために作ってくれました。それに感激して中国語で「ごちそうさまでした」というと周りの大人達が優しく「ブクーチ(どういたしまして)」と言ってくれました。その時僕は言葉が通じ合うってこんなに素敵な事だったのかと実感しました。など

Ⅱ. 事前に自分で書いた作文「北京研修に何を求めて参加しますか?」を読み返し、北京研修でできたこと、逆にもう少し準備が必要だったことなど、事前の作文について思ったことを書きましょう。

- ・英語が話せた。 ・ 自己紹介などで中国語を話せたので目標達成。日本語を教えた。
- ・ホストファミリーと仲良く過ごすことができた。
- ・食文化を知ることができた。辛い食べ物もあったが薄い味のスープがあり中和された。
- ・中国語をもっと勉強していけばよかったと反省です。
- ・日本のどこから来たのかやお土産の説明を詳しくできればよかった。メールで今後教えたい。
- ・「直前に勉強しても効果なし」「習うより慣れろ」など感じ、ホームステイ中は肌で感じたことを会話した方が早く自然と話せるようになってしまった。 など

事後レポートから事前レポートの目的で上げた語学やホストファミリーとの交流などは果たせた者の感想が目立った。例えば中国語で「ごちそうさまでした」と言うと「ブーチ（どういたしまして）」と周囲が応えてくれて言葉が通じた実感があったという感想。一方、逆に中国語や英語の勉強不足を実感している者や事前の中国イメージと実際の中国文化や生活を知った者の感想が考察できる。

(3) 北京研修の考察

「中国語をもっと勉強しておけばよかった。」という感想には「何か」を行うために学ぶという事前学習の姿勢から、「中国の友人と話す」ためには中国語を勉強する必要がある、という具体的なコミュニケーション能力の必要性から学ぶ姿勢の変化が考察できる。また「中国語不勉強でお別れや感謝の言葉が言えなかったことなど反省です。それでも僕はホームステイに言ってよかったと思います。言葉が通じない事を知れたからです。」という、正直な反省と自分が「今は出来ないこと」を知ることを北京研修で掴んだ生徒は他にも多くいたように考察できる。

2. 学習意識調査

先行研究から日本の高校生は消極的な学習意識で、中国の高校生は積極的であることが考察できるが、当校中学生と怡海分校中学生の学習意識調査では、同様な傾向は見られるもののそれに加え私学中学生の学習への意識を考察することができる。中学3年生と1年生の相違があるため意識を単純に比べることは難しいが怡海分校中学生との相違によって日中中学生の考察を行う。

【調査対象】

- ・藤嶺学園藤沢中学校 計49名(中学3年生44名 回答： 5名 無回答：5名)
- ・北京第八中学怡海分校 計49名(中学1年生48名 中学生2年生1名 回答：44名〔中2生含む〕無回答：5名)

①学業・成績について

「成績に満足しているか」について「とても満足している」「まあまあ満足している」と答えた生徒は当校18.1%に対し、怡海分校40.9%である。「あまり満足していない」「まったく満足していない」と答えた生徒は、当校75.0%で怡海分校は59.0%であった。

「よい成績を取るために頑張りたいか」

「よい成績を取るために頑張りたい」 当校72.7% 怡海分校70.5%

「よい成績を取りたいが、そんなに頑張ろうとは思わない」 当校15.9% 怡海分校27.3%

「よい成績を取りたいとは思わない」 当校 2.0% 怡海分校 2.0%

当校生徒72.7%の生徒が「よい成績を取るために頑張りたい」と思っており、成績は18.1%が満足している。一方、怡海分校は70.5%の生徒が「よい成績を取るために頑張りたい」と思っており、自分の成績は40.9%が満足している。当校生徒は学習意識も高いのだが満足度が怡海分校生徒に比べ低いことが考察できる。中学3年生と1年生の差という考察もできる。

②「宿題以外に予習、復習するか」

「いつもそうだ」「時々そうだ」合わせると 当校47.7% 怡海分校61.4%

「授業で習ったことを自分でもっと詳しく調べるか」「いつもそうだ」「時々そうだ」合わせると 当校15.9% 怡海分校52.3%

宿題以外の予習、復習は学習文化の違いが考察できる。怡海分校生徒は中学1年生から6割の生徒が宿題以外の予復習を行い、自分でもっと詳しく調べる生徒は5割を超えている。一方、当校中学3年生で5割近くの生徒が予復習を行い、自分で詳しく調べる生徒は15.9%である。自分で取り組むことを学習習慣としている中国の文化と、宿題をこなすという日本の学習の文化の違いが考察できる。さらに考えると日本の家庭学習は学習塾の影響により、誰かに教わるものという姿勢が全体としてあるのかもしれない。

③よく発言させる授業

「いつもそうだ」「半分以上そうだ」を合わせると怡海分校86.3%で当校63.6%である。怡海分校は、86.3%と発言させる授業は多く感じられるが、当校も63.6%の生徒が発言させる授業を受けていると意識している。当校生徒も6割以上の生徒が発言させる授業と意識しており、発言が必要な能動的な姿勢の授業が行われている。一方、怡海分校86.3%で五人に四人以上は発言させる授業と意識しており、当校生徒よりも能動的な姿勢が考察できる。

また、学習意識調査で授業形態や授業目的志向は日中において、差があまりなく私学の受験勉強と経験や思考力、表現力などの知識偏重だけではない教育実践が試行錯誤されており、生徒たちもそのような受験勉強と思考力や発表力の授業を志向する傾向にある。しかし日中ともに「どちらかと言えば好き」や「どちらかと言えば嫌い」という今までの勉強形態からの消極的な志向が現われているように考察できる。

3. 異文化交流の再考察及び教育方法の再考察

北京研修の考察を前述したが、ホームステイ最終日、ホテルに生徒各々が帰って来た時の表情は前述した通りである。怡海分校の生徒とその保護者、親族や保護者の会社の同僚までもが「自分の子どもの日本の友達になる子がホームステイに来る」という保護者意識が高いと考察できる。それは事後レポートを読む中でもわかる。日本の場合ではどうだろうか。日本でも家庭や親族、友人などの交際は、中国などからのホームステイの子どもには行うとも思う。しかしながら北京研修の生徒の表情から考察できるものは、北京研修という団体研修の後半が、自分一人で中国の家庭に二晩泊まり、日本語が通じない場所で2日間を過ごす中で、自分から上手く言葉は通じなくともホストファミリーや周囲の人から多くの心遣いを頂き、感動している様子である。そして今、できない自分をさらに成長させようという意志が具体的な成長過程として濃縮されているのが、異文化交流であると考察できる。

教育方法の再考察としては、その生徒が尊重される機会を与え、その生徒が自ら何かを感じ、気が付くことが異文化交流以外でも必要なことのように考察できる。E.H.エリクソンの概念に経験の儀式化⁵があるが、生徒の社会性は人と人との関わり合いで発達していく。学校教育においても人と人との相互交渉、関わり合いがその個人の成長を促すと考察できる。

脚注

- 1) 拙稿「私学中学生の学習意識調査に基づく教育方法に関する一考察」日本私学教育研究所『紀要 第48号』2012年
- 2) 日本青少年研究所『高校生の勉強に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較』2010年を参考に作成。
- 3) 「質実剛健」の「質実」とは素朴で外見の虚飾にまどわされず、真面目にもの本質と真実を探求することを指し、「剛健」とは、何事にも動じない強い意志と健康な肉体である。即ち、自己が一人の人間として貴い存在であることに目ざめ、真に社会に貢献できるよう、その人格の完成につとめることを教えている。「勇猛精進」とは、仏教語の引用であるが、勇みすすんで屈しない心をもって、苦難に打ち克ち、仏道を修行することから転じて何事にも動じない勇氣、即ち猛烈にやる気を起こし、あらゆる困難にも負けず、大きな目標を達成するために、一生懸命努力を怠らないこと。
- 4) 『大學新聞 6月1日』大学新聞社2010年で前掲書2.が考察されている。
- 5) 拙稿「E.H.エリクソン『経験の儀式化』概念に関する一考察」関東学院大学人文学会社会学部会『社会論集第13号』2007年

参考文献

- 日本青少年研究所『高校生の勉強に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較』2010年
千石 保『日本の高校生』NHK出版1998年
今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波書店2012年
柏木恵子『おとなが育つ条件』岩波書店2013年
柏木恵子『子どもが育つ条件』岩波書店2008年